CHIAKI YOKOTA

—— 横田千明

2025

Be Factory

2025・5

横 田 千 明 | CHIAKI YOKOTA

2010年 名古屋芸術大学大学院　修了

| 賞歴 |

2015年　三重県展 最優秀賞
2017年　三重県文化新人賞
2018年　名古屋寺町芸術大賞展 大賞
　　いりやKOUBO展 準大賞

| 個展 |

2008年2010年2011年2013年　Gallery APA Main room (名古屋)
2015年2017年2018年2020年2024年 個展 gallery noivoi (名古屋)
2016年　ギャラリー数寄 (江南)
2019年　ギャラリーかんしょ(名古屋
　　ギャラリー寺町 (三重県桑名市)
　　岩田商店 (三重県いなべ市)
2020年　ギャラリーmos (三重県松阪市)
2021年　いりや画廊 (東京)
2023年　乾漆の森 東京ガーデンテラス紀尾井町 (総合企画 いりや画廊)
　　横田の乾漆 鈴麓寫眞 (三重)
2023年　個展 ギャラリー寺町 (三重県桑名)
2024年　乾漆彫刻ー横田千明ー（日本橋高島屋）

| グループ展 |

2012年　ART KYOTO
　　Gallery APA
2019年　いりやKOUBO準大賞展 (いりや画廊 東京)
2020年　2021 2022 2023
　　ART TAICHUNG 2020 (いりや画廊)
2020年　台湾×日本現代漆芸創作交流展 (FEI ART MUSEUM YOKOHAMA)
2021年　台湾×日本現代漆芸創作交流展交流展 (FEI ART MUSEUM YOKOHAMA)
2022年　時を紡ぐー漆のいまー(日本橋・横浜高島屋 美術画廊)
2020年　台湾×日本現代漆芸創作交流展交流展 (FEI ART MUSEUM YOKOHAMA)
　　CBCが選ぶ新鋭作家展 (松坂屋名古屋 美術画廊)
　　KOGEI Art Fair Kanazawa (ギャラリーMOS)
2023年　大阪関西国際芸術祭 (Art Fair 2023 ギャラリーMOS)
　　立体造形小品展（三重画廊）
2023年　台湾×日本現代漆芸創作交流展　FEI ART MUSEUM YOKOHAMA
　　CBCが選ぶ新鋭作家展（松坂屋名古屋 美術画廊）
2023年　彫刻になった生き物たち展（名古屋高島屋 美術画廊）
　　KOGEI Art Fair Kanazawa（ギャラリーMOS)
2024年　世界遺産がつなぐ糸
　　富岡製糸場西置繭所多目的ホールにおける場と表現
　　日台漆芸交流展 伝統と 現代、そして未来へ
　　FEI ART MUSEUM YOKOHAMA
　　松阪カルチャーストリートspin-off　Exhibition
　　あべのハルカス近鉄本店
2024年　KOGEI Art Fair Kanazawa (ギャラリーMOS)
　　彫刻になった生き物たち展(名古屋高島屋 美術画廊)
　　ONE ART TAIPEI いりや画廊 台湾 台北

－ 漆の国の妙な世界 －（2025）

1000年以上昔、奈良時代に仏像制作の技法として用いられ、時代が変わる頃には、木彫と入れ替わるようにして衰退した乾漆彫刻。当時とほぼ変わらない方法や材料を使い、時間と手間をかけるこの技法は、1000年前からタイムスリップしてきたかのような技法です。時代の流れや技術の進歩に乗らず、独特の有り様のまま現代に復活した乾漆彫刻は、人がもつ創造力や、自然がもたらす素材の力を示してくれます。 今回の展覧会では、この技法によって制作した、少し変わった生き物達を展示します。 私にとって彫刻は、彫刻を介して鑑賞者と私、互いのイメージで繋がるコミニュケーションの手段でもあるのだと感じます。それにしてはとても遠回りな手段ですが、少しずつ実体化する中で、色付き香り、存在を強くして彫刻自ら呼吸し、ものを発し始めます。イメージは現実の世界で膨らみ、いのちを宿して自由に語りはじめる。そんな彫刻との対話を楽しめる空間、その余韻の中で膨らむ新たな想像の世界、または物質的価値や時間から解放され、本能を頼りに、生を満喫する感覚。作品や展示を通して鑑賞者へ、また私自身、日々の制作の中で、そんなものが感じられ、広がっていくと嬉しい。

横田　千明

［妙なドードー］2025

脱活乾漆（漆、砥の粉、麻布、木材、銅番線、顔料、金粉）

H140×W70×D115（cm）

［ うさぎの帳 ］2025

脱活乾漆（漆･砥の粉･麻布･木材･銅番線･顔料･金粉）

H30×W35×D18（cm）

［ うさぎの間 ］2025

脱活乾漆（漆・砥の粉・麻布・木材・銅番線・顔料・金粉）

H15×W40×D17（cm）

［ 妙なネコ ］2025

脱活乾漆（漆･砥の粉･麻布･木材･銅番線･顔料･金粉）

H14×W49×D16（cm）

［ 妙なイモムシ］2025

脱活乾漆（漆･砥の粉･麻布･木材･銅番線･顔料･金粉）

H20×W11×D14（cm）

［ きのこのうた ］2025

脱活乾漆（漆･砥の粉･麻布･木材･銅番線･顔料･金粉）

H48×W38×D42（cm）

[sanagi] 2025

脱活乾漆（漆・砥の粉・麻布・木材・銅番線・顔料・金粉）

H20×W12×D13（cm）

［ 宿借さん1・2 ］2025

脱活乾漆（漆、砥の粉、麻布、木材、銅番線、顔料、金粉）

左 H９×W10×D10 / 右 H8×W8×D8（cm）

［ ぱくぱく其の一・其の二 ］2025

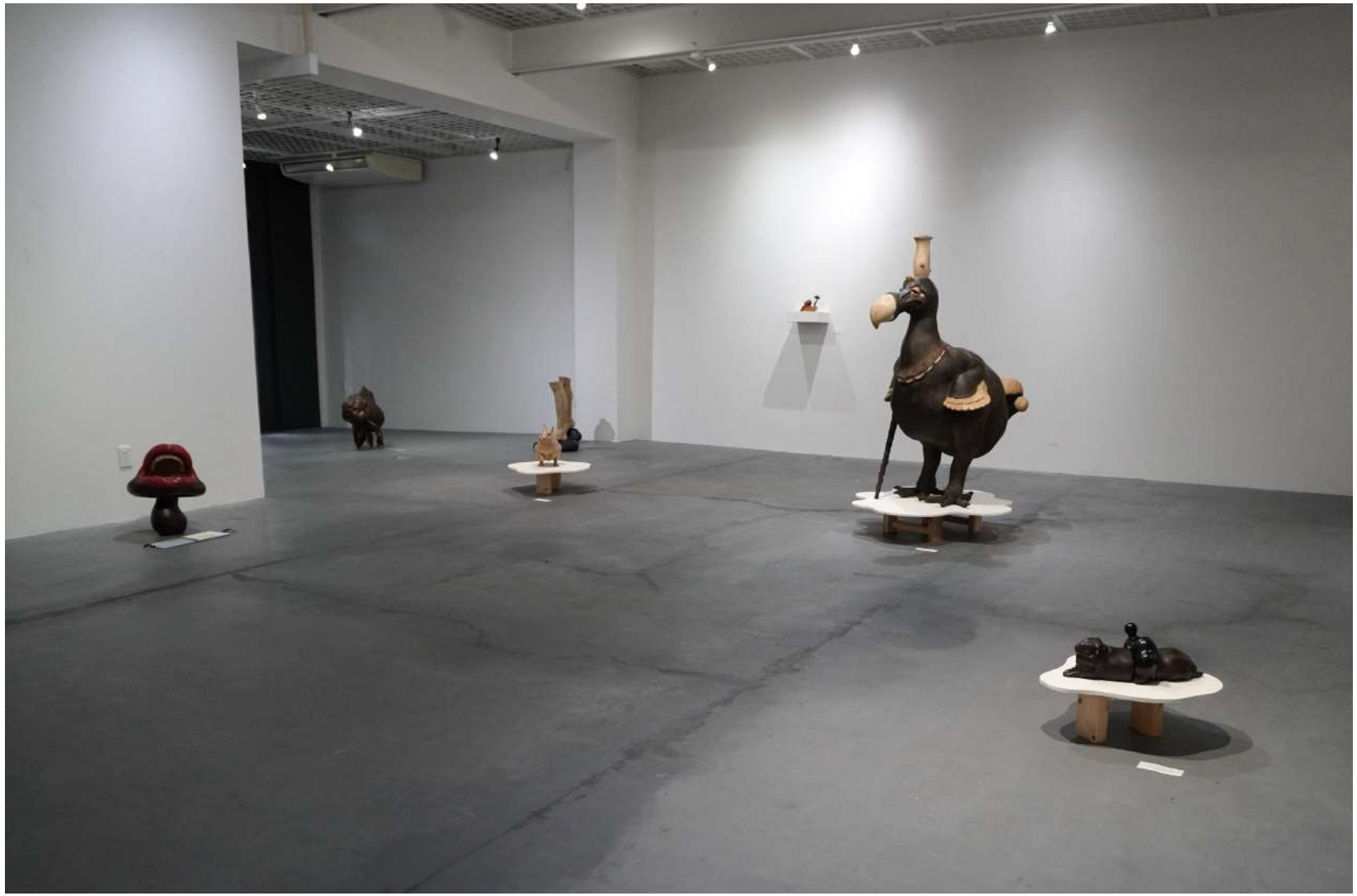
脱活乾漆（漆･砥の粉･麻布･木材･銅番線･顔料･金粉）

左　H57×W77×D40 / 右 52×W70×D30（cm）

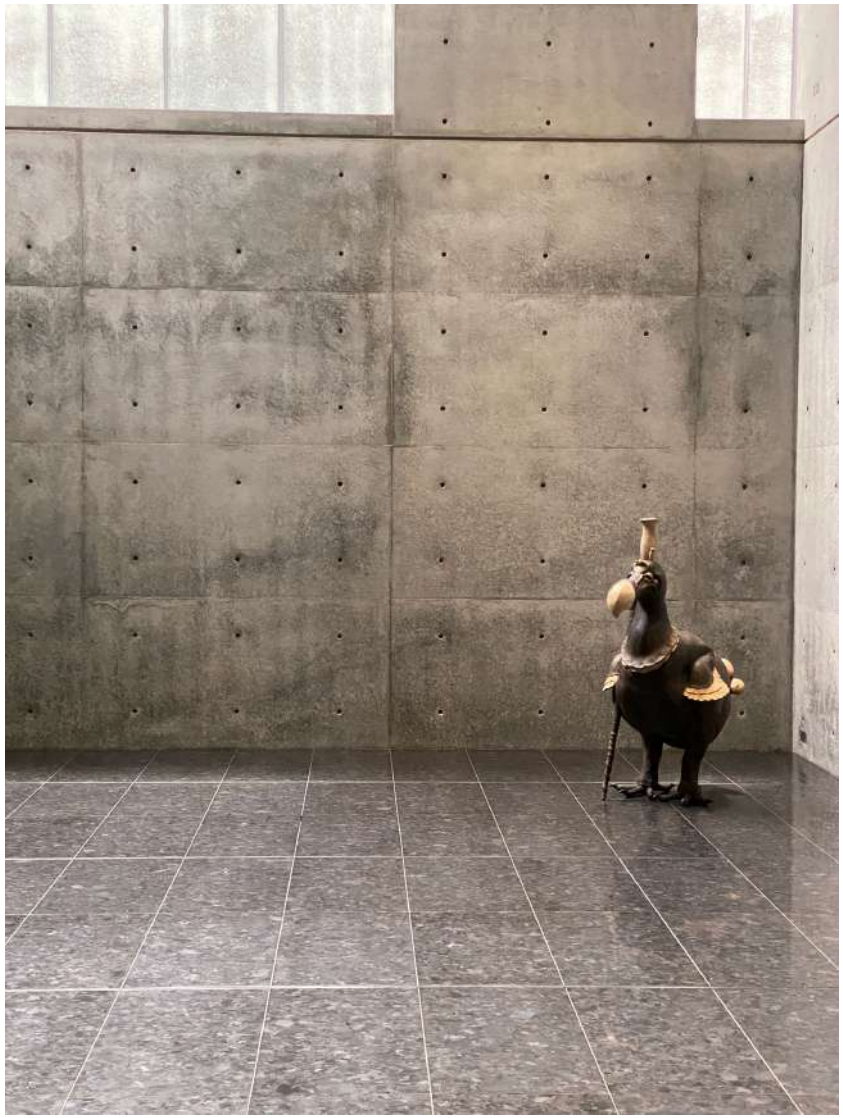
［ 左足 右足 ］2025

脱活乾漆（漆･砥の粉･麻布･木材･銅番線･顔料･金粉）

左足　H61×W31×D32 / 右足 H61×W30×D35（cm）



展覧会全景



『妙なドードー』都内　K邸にて収蔵

乾漆の森(2023)

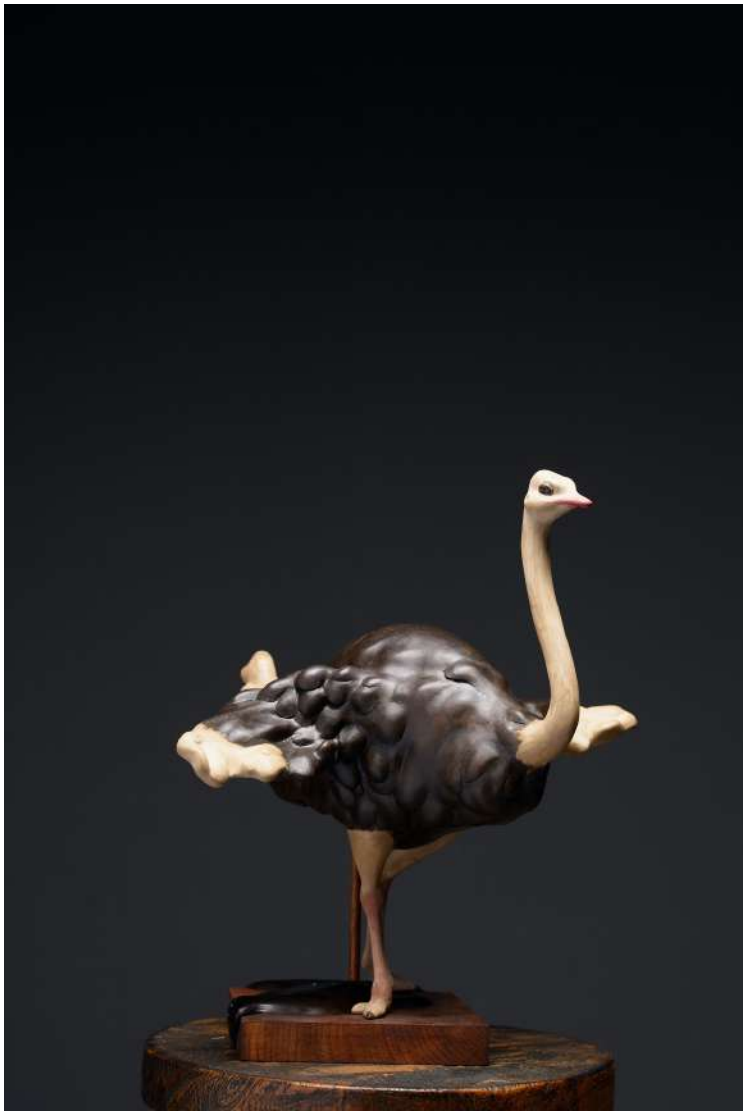
大きな生き物も、小さな生き物も、どんな存在も
それぞれ等しくこの世で自分の一生を全うする
私たちが生きる世界は,それはそれは広くて多様である
一つの物事に対しても視点が違えば捉え方は全く変わる
私が経験できるのは人間としてのこの私から観た世界だけ
しかし想像することはできる
そしてそれは楽しくもあり創作意欲を刺激する
対象の視点を想像すると、自分が持つ当然の価値観が一方的だった事に気付く
知らない世界がとても多いことにも気付く
そんな未知の世界には好奇心を掻き立てる魅力がある
彫刻としての乾漆は奈良時代に仏像彫刻の技法として栄え、木彫技術の進歩によって
途絶えてしまった
それが時を経て、彫刻家により彫刻の技法として再現され今にうけつがれている
進化とともに衰退した技術をここであえて続けるのは
この乾漆という技法の特異性や、自然界から得る素材が
存在に大きく魅力を与える力があるから
命たちの哀愁さえ感じる生ぐさい生命力を
この乾漆という技法で作品にしたい
そしてその存在と出会うことで違った視点を体験できたり、好奇心がくすぐられたり、
そんな異和感のある空間をつくりたい

[Organism (Radish)] 2022

H45×W80×D30 (cm) / 乾漆

[Gorilla] 2013

乾漆 / H31×W49×D49 (cm)



[Ostrich] 2017

乾漆 / H25×W25×D25 (cm)

[mouton Ⅲ] 2015

乾漆 / H74×W30×D88 (cm)

[Common fig] 2023

乾漆 / H36×W22×D21 (cm)

[tortoise] 2018

乾漆 / H70.W60.D102 (cm)

[Luck] 2022

乾漆 / H22×W8×D30 (cm)

[Animal S (Walking White bear)] 2016

乾漆 / H12×W7×D18 (cm)

［ セイウチ L ］2011
乾漆 / H74×W75×D160(cm)

[Animal S (Brown bear)] 2016

乾漆 / H12×W7×D18 (cm)

[Animal S (White bear)] 2016

乾漆 / H12×W7×D18 (cm)